

平館遺跡・平館跡

新月公民館新築整備事業に伴う発掘調査報告書

2023

気仙沼市教育委員会



平館遺跡・平館跡空撮（東から）

序 文

気仙沼市内には、縄文時代から近世に至るまでの各時代の遺跡が数多く点在しています。いずれも先祖が築き上げてきたものであり、地域の歴史を究明していくうえで、大事な文化遺産であります。これらの貴重な文化遺産を守り、後世に伝えていくことこそ、私達にとって、大きな責務であると考えております。

本書は、新月公民館の新築整備事業に伴う工事に先立って令和2年に実施した、平館遺跡・平館跡の発掘調査報告書です。

新月公民館は、地域の皆様の生涯学習の場として中心的な役割を果たしてきましたが、近年は施設の老朽化が著しく、公民館機能を維持するため、新築整備事業の実施が決まりました。

新しい公民館は令和3年度に開館し、多様化する活動に対応する生涯学習の拠点として、さらなる利用が期待されるところであります。

本書は発掘調査の成果をまとめたもので、本書が、市民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、地域の歴史を明らかにする一助となるとともに、埋蔵文化財に対する御理解が深まりますようお願いのものであります。

結びに、発掘調査に際し、御理解、御協力をいただきました関係者各位に対し、厚く御礼申し上げます。

令和5年3月

気仙沼市教育委員会

教育長 小山 淳

例 言

- 1 本書は、新月公民館新築整備事業に伴う平館遺跡・平館跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、気仙沼市教育委員会が実施した。
- 3 本書に係る整理・報告書作成作業は、令和2～4年度にかけて気仙沼市教育委員会が実施した。
- 4 発掘作業における記録図面作成及び写真撮影は、調査担当者が行った。
- 5 空中写真撮影は、株式会社イビソクに委託した。
- 6 調査補助員として、公益社団法人気仙沼市シルバー人材センターから会員の派遣を得た。機械掘削作業は、株式会社小松工業に委託した。
- 7 本書は、須藤敏直が執筆し、製図・挿図・図版作成を森千可子、確認調査出土遺物実測・拓本を原田享二、その他の遺物実測・拓本、写真撮影・表作成を須藤が担当し、森が編集した。
- 8 出土遺物及び調査に関する諸記録類は、気仙沼市教育委員会が保管している。
- 9 調査において、次の方々や諸機関からご協力を賜った。記して感謝いたします。(敬称略・順不同)
気仙沼市立新月中学校 新月公民館 気仙沼市総務部税務課

凡 例

- 1 本文中における遺構略号は以下の通り。
P：柱穴・ビット SD：溝跡 SI：竪穴建物跡 SK：土坑 SX：その他遺構
- 2 遺構番号は、遺構の種類に関係なく検出順に連番を付したが、調査の過程で遺構でないことが判明した場合は欠番とした。
- 3 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 4 平成14年4月1日の測量法の改正に従い、本書の挿図には世界測地系（平面直角座標系第X系）に基づくグリッドを表示しており、方位標は真北を指す。
- 5 土色の記述にあたっては、『新版標準土色帖』（小山・竹原 1996）を用いている。
- 6 遺物への注記は、出土地点・出土層位・出土年月日を記入した。

序 文
例 言
目 次

第1章 調査に至る経緯・経過

1. 平成4・7・8年度の発掘調査	1
2. 平成30年度の発掘調査	1
3. 令和元年度の発掘調査	2
4. 令和2年度の本発掘調査	4

第2章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	5
3. 周辺の遺跡	6

第3章 発見された遺構と遺物

1. 基本層序と検出遺構	9
(1) 基本層序	9
(2) 土坑	9
(3) ピット	12
(4) 溝跡	12
(5) その他	12
2. 遺物	15
(1) 土器	15
(2) 土製品	19
(3) 石器	19

第4章 まとめ 21

参考・引用文献 22

報告書抄録

挿図目次

第1図	平成4・7・8年度調査区・・・・	1	第8図	検出遺構断面図・平面図(1)・・・・	11
第2図	平成30・令和元・2年度調査区・・・・	2	第9図	検出遺構平面図・断面図(2)・・・・	13
第3図	平成30年度確認調査出土遺物・・・・	3	第10図	検出遺構平面図・断面図(3)・・・・	14
第4図	平館遺跡・平館跡の位置・・・・	7	第11図	土器(1)・・・・	16
第5図	気仙沼市遺跡地図・・・・	8	第12図	土器(2)・・・・	17
第6図	基本層序・・・・	9	第13図	土製品・・・・	19
第7図	本調査検出遺構配置図・・・・	10	第14図	石器・・・・	19

表目次

第1表	土器観察表(平成30年度確認調査)・・・・	3
第2表	石器観察表(平成30年度確認調査)・・・・	3
第3表	調査体制・・・・	3
第4表	土器観察表・・・・	18
第5表	土製品観察表・・・・	19
第6表	石器観察表・・・・	20

写真図版目次

図版1	空中写真遠景・・・・	23	図版6	作業風景・小学生遺跡見学風景・・・・	28
図版2	空中写真近景・・・・	24	図版7	遺物写真(1)・・・・	29
図版3	遺構写真・・・・	25	図版8	遺物写真(2)・・・・	30
図版4	遺構写真・・・・	26	図版9	遺物写真(3)・・・・	31
図版5	遺構写真・・・・	27			

第1章 調査に至る経緯・経過

1. 平成4・7・8年度の発掘調査

平成4（1992）年、気仙沼市立新月中学校建設に伴う確認調査が行われ、校庭の東側から多くの遺構・遺物が確認されたことから、平成7・8年度（1995・1996）に本調査が行われた。

平成7年度は現在の新月中学校校舎及び校舎南側校庭・校庭西側道路部分において、縄文時代中期末の深鉢形土器を埋設した複式炉をもつ竪穴建物跡やフラスコ状土坑、近世土壇墓群、坑道跡が検出された。

また、平成8年度は現在の新月中学校駐車場北側の道路部分の発掘調査が行われ、遺跡北斜面に形成された縄文時代中期末後期初頭（大木10式から門前式）頃の遺物包含層が検出された（気仙沼市1998）。

2. 平成30年度の発掘調査

平成30（2018）年度の調査は、新月公民館の建設位置が未確定であったため、建設予定地全域における遺跡の状況を把握する必要があり、9月7日～20日に確認調査（調査面積197㎡）を実施した（気仙沼市2020）。この調査では、幅3～6m、長さ7～9mの南北トレンチを東西に3か所、南北2列、計6か所配置し、縄文土器がまとまって出土した土坑2基と、ビット1基の他、調査地北部を中心に大規模な攪乱跡を検出した。T1SK2出土の縄文土器深鉢（第3図1）は底部を欠く。地文は縄文土を縦方向に施文し、口縁部は無文、頸胴部に刺突を施した鎖状隆帯と沈線で逆J字状文を施文する磨消縄文土器で、大木10式から門前式に比定できる。T2SK21出土の石鐮（第3図2）は、小型の凹基無茎鐮で、岩石種は珪質頁岩である。

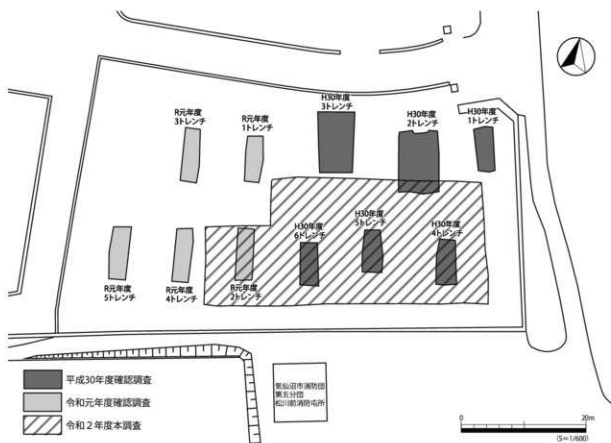


第1図 平成4・7・8年度調査区

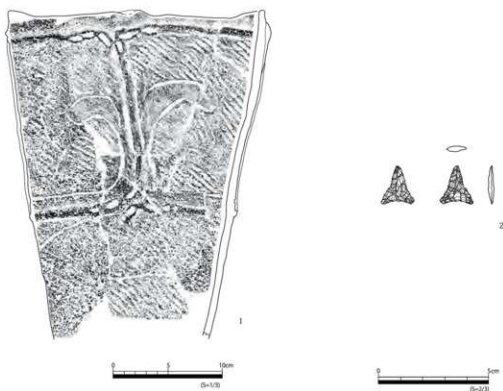
3. 令和元年度の発掘調査

平成30年の確認調査以後、新月公民館建設予定地において、体育館の建設が新たに計画され、建設予定地の面積が拡大されたことに伴い、令和2年1月16日付けで、同地における「公民館建設計画と埋蔵文化財のかかわりについて」の協議書が気仙沼市長（担当：教育委員会教育部生涯学習課）（以下、「事業者」という。）から気仙沼市教育委員会（以下、「市教委」という。）に提出された。市教委は、平成4年度及び平成30年度に協議対象地で実施した調査において、遺構・遺物が確認されたことから、確認調査が必要である旨意見を添えて、宮城県教育委員会（以下、「県教委」という。）に到達した。このことにより、同年2月7日付けで県教委から事業者に、確認調査を実施する必要がある旨回答があった（文第2801号）。続いて、同年2月12日、文化財保護法第94条の規定により、事業者から「埋蔵文化財発掘の通知」が提出され、同年2月21日付けで県教委から通知が発出された（文第2925号）。

体育館建設予定地と、浄化槽等地下に影響を及ぼす範囲を中心に、令和2（2020）年3月18日～3月23日まで確認調査（調査面積80㎡）を実施した。幅2m長さ8mのトレンチを南北2列、約8m間隔に5か所配置した。この調査では、直径約5mに復原した竪穴建物跡検出面で縄文土器2点が出土したが、令和2年度の本調査の結果、竪穴建物跡ではなく採掘跡（SX82）の可能性が高いことが判明した。



第2図 平成30・令和元・2年度調査区



第3図 平成30年度確認調査出土遺物

第1表 土器観察表（平成30年度確認調査）

図番号	出土地点	層位	器種	部位（法量）	特徴	時期	写真図版
3-1	T1 SK2	埋土	縄文土器深鉢	腹原口径 23.6 cm 残高 30.1 cm	小波状口縁、4 単位。外面縄文 L 縦→横帯→刺突。沈線→ナデ。磨消縄文内面ナデ	大木 10 式から門前式	7-1

第2表 石器観察表（平成30年度確認調査）

図番号	出土地点	層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	特徴	残存状態	写真図版
3-2	T2 SK21	埋土	石器	1.73	1.50	0.27	(0.4)	珪質頁岩	凹基、決りやや浅い。小型で薄い。	右側縁の一部を欠く。	7-2

第3表 調査体制

生涯学習課文化振興係

	課長	課長補佐兼係長	技術補佐	庶務	調査員	資料管理
平成30年 (2018)	熊谷啓三	幡野寛治	鈴木寛夫	加藤成巳	鈴木寛夫・青木昭和・石川郁	藤本愛
令和元年 (2019)	熊谷啓三	幡野寛治	鈴木寛夫	加藤成巳	鈴木寛夫・須藤好直	藤本愛
令和2年 (2020)	三浦永司	幡野寛治	鈴木寛夫	濱秀斗	森千可子・須藤好直	藤本愛

4. 本発掘調査（令和2年度）

試掘・確認調査の結果、公民館の建物基礎が遺構に影響を及ぼすと考えられる東西 45 m、南北 19 m（一部 12 m）の範囲である調査面積 778㎡について、竪穴建物跡および関連する遺構の把握を目的として事前発掘調査を実施した。基準点は、GPS を用いて調査区の東と南に 2 点打設した。

再利用する表土の碎石は、5 月 18 日に 0.45㎡パワーショベル 1 台と 4 t ダンプ 1 台を用いて掘削・場内小運搬し別置きした。5 月 20 日～6 月 23 日に、0.45㎡パワーショベル 1 台を用いて造成土を機械掘削し、作業員 6 名で遺構の平面検出を行い、逐次遺構メモ図（縮尺 1/100）を作成した。平面検出した遺構を半載ないし断ち割り、断面写真撮影・断面実測（縮尺 1/20）後、遺構全体を掘り下げ・写真撮影し、6 月 9 日～12 日に電子平板測量、6 月 18 日にドローンを用いた調査区の空中写真撮影（委託業者：株式会社イビソク）を実施した。6 月 19 日～24 日に補足調査及び気仙沼市立新城小学校 6 年生、気仙沼市立月立小学校 5・6 年生と気仙沼市立新月中学校 1・2 年生を対象とした見学会（新月公民館地域学校協働推進事業ほか）実施後、6 月 25 日～7 月 3 日に表土以外の掘削土を埋め戻して調査を終えた。

第2章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

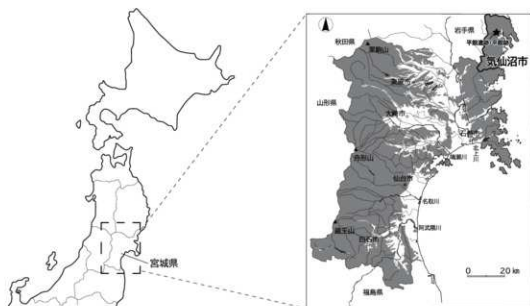
平館遺跡・平館跡の所在する気仙沼市は宮城県の北東部に位置し、北は岩手県陸前高田市、西は岩手県一関市に、南は宮城県南三陸町に接する。地形的には、北上高地南部の東側に位置し、リアス式の三陸海岸が太平洋に面する。

平館遺跡は気仙沼市の北部中央に位置し、気仙沼湾奥の東流する大川が形成した沖積地の微高地上に立地する。調査地は平館遺跡のほぼ中央に位置し、5万分の1地質図幅（気仙沼）（産総研地質図ナビ <https://gbank.gsj.jp/geonavi/>）では、沖積層、砂・粘土および礫に分類されている。調査区での遺構検出面の基盤層の主体は粘土であったが、比較的標高の高い北西隅では礫層を、調査区東部の深い遺構の壁面では、粘土を主体とする層の下に礫層、さらにその下に砂礫層がみられた。調査地は東方の東中才断層と下八瀬断層に挟まれている。調査地北方には山地が広がる。調査地以南の気仙沼湾周辺では段丘が形成され湾が広がり、堆積した新生層が古生層を覆っている（気仙沼市 1986）。

遺跡は周囲を山に囲まれており、北東に鍋越山（347.9m）、北西に府中山（196.4m）、その谷間を松川川、府中山の西を八瀬川がそれぞれ南流して大川に合流する。また、南西の熊山（655.1m）と手長山（540.8m）の谷間を金成沢川が北流し大川に合流する。

2. 歴史的環境

気仙沼市内には縄文時代から近世にかけての遺跡が多数分布しており、現在 181 か所の遺跡が登録されている。これらの遺跡の多くは海岸線に沿った段丘及び丘陵上に点在しており、特に縄文時代



第4図 平館遺跡・平館跡の位置

の貝塚や中世の城館跡が多い。

縄文時代の遺跡は、市内に約 70 か所知られている。沿岸部に多くの貝塚が形成されているのが当該地域の大きな特徴である。縄文時代の代表的な遺跡は、市史跡である磯草貝塚、浦島貝塚、内の脇 1 号・2 号貝塚、南最知貝塚、藤ヶ浜貝塚、前浜貝塚のほか、田柄貝塚、波怒奈館遺跡、台の下遺跡・台の下貝塚などがある。田柄貝塚（宮城県 1986）は、昭和 54（1979）年に 3,500m²が発掘調査され、中期後葉の竪穴建物跡 2 棟、後期前・末葉の成人骨を埋葬した土壇墓 4 基、後期中葉から晩期中葉の埋葬犬骨 22 体、北斜面で後期前葉の貝層・遺物包含層と南斜面で後期中葉から晩期前葉の貝層・遺物包含層等を検出した。南斜面の貝層・遺物包含層は最大厚さ 2 m を測る大規模なもので、当該期の基準になる重要な遺跡である。波怒奈館遺跡では、前期から中期初頭の貝層や遺物包含層等を検出した。この貝層から、大量のマグロ骨と解体具と考えられる粘板岩性の板状石器が出土した。また、台の下遺跡の調査では、中期後葉から末葉の複式炬を伴うものを含む竪穴建物跡 13 棟や掘立柱建物跡 4 棟、土坑 80 基など、多数の遺構・遺物が検出された（気仙沼市 2018）。また、縄文時代後期の竪穴建物跡、貯蔵穴と思われる土坑群のほか、南西方向へ下る斜面に大量の土器や石器が廃棄された捨て場が検出された（気仙沼市 2020）。台の下貝塚の調査では、前期から晩期の土器や石器などが出土し、貝層や竪穴建物跡、土坑が検出されたほか、後期前葉・晩期には、土壇墓と土器埋設遺構で構成される墓域が形成されていたことがわかった（気仙沼市 2021）。

弥生時代については、田柄貝塚や台の下貝塚で弥生土器が少量出土しているものの、これまで明確な遺構は検出されていない。

古代の遺跡としては、塚沢横穴墓群、三島古墳群等がある。塚沢横穴墓群は、日本列島最北端に造られた横穴墓であるとともに、気仙沼沿岸部と江刺方面の内陸とを結ぶ最短の道沿いに立地する。南流する八潮川の中流域の東岸 A 地区に 7 基、西岸 B 地区に 8 基が確認され、昭和 50（1975）年に A 地区 7 基、昭和 54（1979）年に B 地区 3 基が発掘調査された。A 地区 1 号墓から須恵器壺、6 号墓から未成年男性人骨 1 体、刀装具、刀子、鉄鏃、須恵器・土師器片等が出土した。三島古墳群は、本吉町大谷に所在し、現在 8 基の墳丘が確認されているが、かつて 21 基あったと伝えられている。明治末に古墳のある崖下の造成工事で勾玉、切子玉、管玉等計 50 個が出土し、現在は東京国立博物館に保管されている。

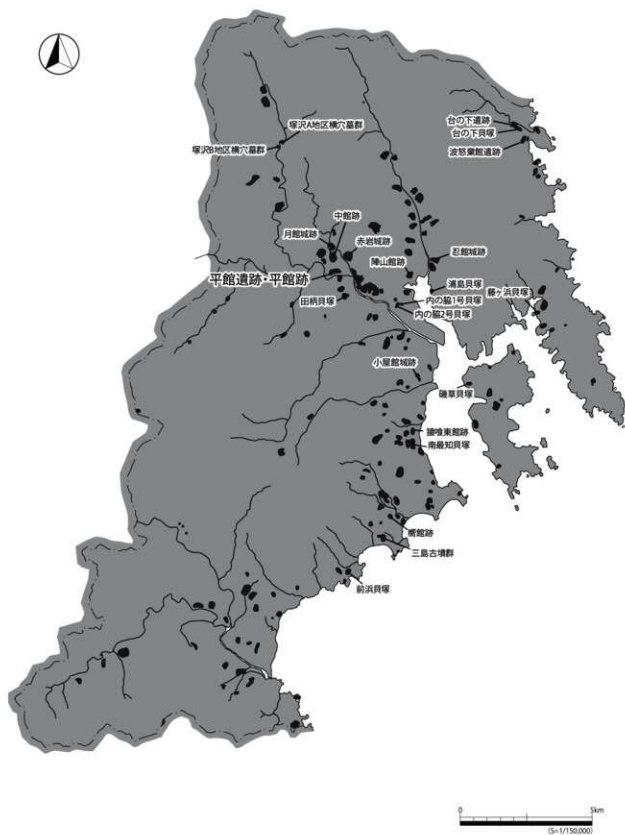
平安時代については、台の下遺跡で、鍛冶炉を伴う複数の竪穴建物跡が検出され、鍛冶関連遺物などが出土した（気仙沼市 2020）。

中世の遺跡は、赤岩城跡、月館城跡、中館跡、陣山館跡、猿喰東館跡、小屋館城跡、忍館城跡等、81 か所の城館が所在している。猿喰東館跡では、平成 25（2013）年の調査で、堀跡、土塁、通路状遺構のほか、平場で多くのピットが確認されている。また、三陸沿岸道路の建設工事に伴い宮城県が実施した小屋館城跡の発掘調査では、丘陵尾根を分断する形の堀切が確認されている（宮城県 2020）。城館跡の他には、赤岩館経塚群、上鹿折板碑群などが知られている。

近世以降では、平成 26（2014）年に行われた櫛館跡の発掘調査で、江戸時代初期の経塚（礫石経）が確認されており、供養塔の銘文や出土した古銭（主に寛永通宝）から、1679 年前後に造立された

ものと考えられている。また、平館跡・平館遺跡や波路上西遺跡などで近世以降の土坑墓、木棺墓が確認されている。

平館に関する記録については、『月館村風土記（寛文）』には、元禄 11（1698）年 3 月 27 日付で、館下屋敷肝入五兵衛繁好からその子、喜右衛門へ渡された書類に以下のような砂鉄産出に係る記事をみることができる。「（前略）同町（気仙沼町）より月館村の平と申す所にて先年より砂鉄取り申候に御座候。その所まで十三丁十五間御座候。この末ともに砂鉄取り御覧遊ばされ候儀も御座候右の通り申上ぐべく候事。」また、「平屋敷」に係る記事は『月館村風土記（寛文）』に「月館村湿地屋敷数書上申候覚」に『式軒 平屋敷』とあり、『月館村風土記（安永九年御用書出）』に、「屋敷名七十六」、「平屋敷 十四軒」とある。



第5図 気仙沼市遺跡地図

第3章 発見された遺構と遺物

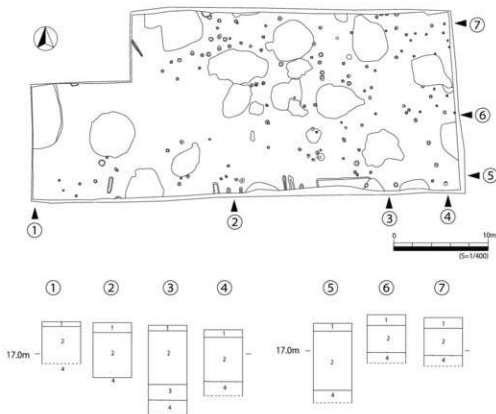
1. 基本層序と検出遺構

(1) 基本層序

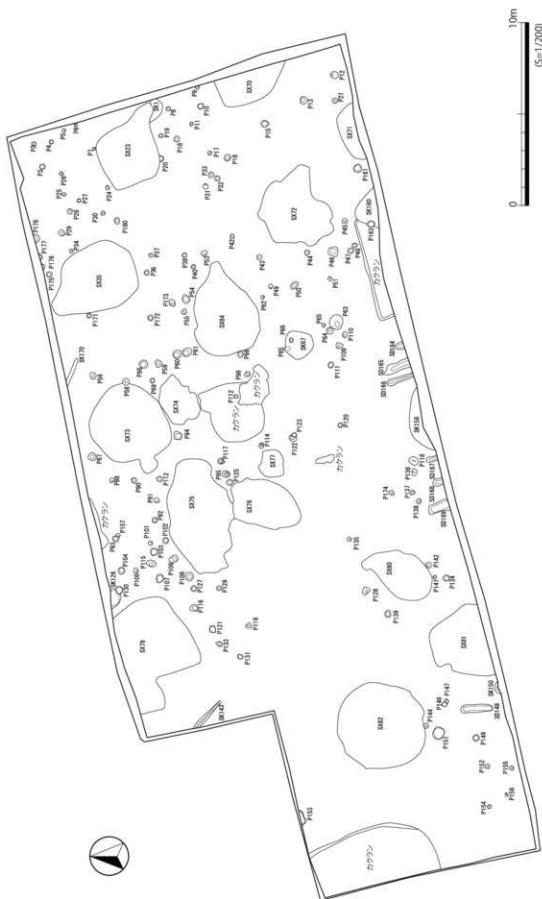
基本層序は、1 駐車場表土（碎石）、2 造成土、3 自然堆積層、4 基盤土（地山）である。遺構検出面の大半は基盤土の黄褐色粘質土で、調査区北西隅の一部で黄褐色粘質土下に礫層、東部 SX23 壁面においては礫層下に砂礫層を検出した。遺構検出面は北西から南東に下がる（緩傾斜面）。北西部の駐車場造成土も薄く、後世の削平が著しい。南西隅では部分的に造成土と地山との間に自然堆積層が残っていた。

(2) 土坑

土坑は 8 基を検出した。土坑 8 基のうち 1 基はフラスコ状土坑（SK1）で、2 基（SK143・170）は細長い溝状土坑である。SK143・170 は調査区北部の比較的標高の高い位置で検出した。縄文時代の遺物包含層が残っていないため、断定はできないが、自然の営力や人工的な削平等により遺構面が 1 m 程度削平されたとすると、SK143・170 は尾根の稜線方向に直交する位置に検出した細長く深い土坑であり、縄文時代の落とし穴と考えられる。



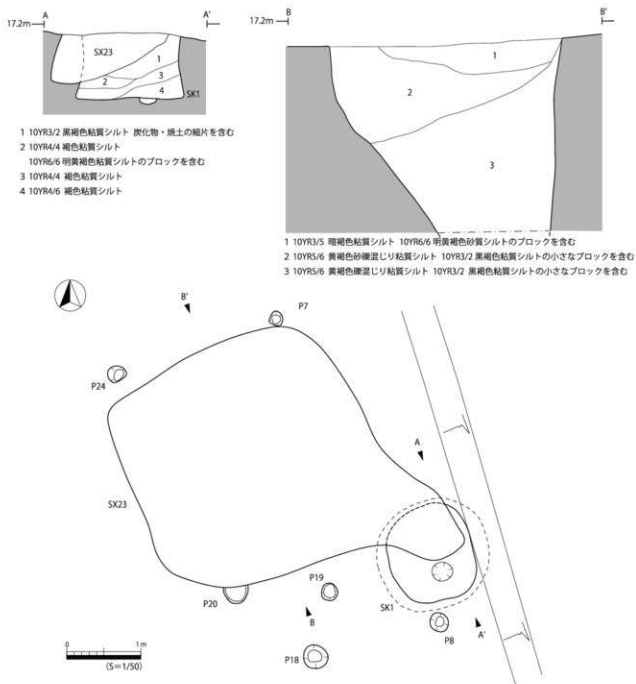
第6図 基本層序



第7図 本調査検出遺構配置図

【SK1】

調査区東壁際で検出した上端東西 1.13m、南北 1.30m、下端（底面）東西 1.50m、南北 1.45m、深さ 0.82m、底面中央南寄りに直径 0.26m、深さ 0.1m のビットを有するフラスコ状の土坑である。埋土は上下 2 層に大別でき、上層には焼土と炭化物の細片を含むが、下層にはほとんど含まない。遺構の重複関係から SX23 より古い。遺物は、堆積層より縄文時代中期末（大木 10 式後半）、後期初頭（門前式）の縄文土器深鉢、円盤状土製品、石鏃、不定形石器などが出土した。縄文時代後期初頭の貯蔵穴と考えられる。



【SK143】

調査区北西隅で検出した幅 0.25m、長さ 2.93 m、深さ 0.42m の細長い土坑である。遺物は、縄文土器深鉢片（大木 7 式）が出土した。縄文時代中期前葉の落とし穴と考えられる。

【SK170】

調査区北壁際で検出した幅 0.18m、長さ 1.7 m 以上、深さ 0.59m を測る細長い土坑である。遺物は、縄文土器深鉢片が出土した。縄文時代の落とし穴と考えられる。

【SK158】

調査区南壁際で東西 5.9m、南北 1.0 m 以上、深さ 0.6m 以上を測る土坑の一部を検出した。検出範囲の埋土は 3 層に大別でき、上層ほど礫を多く含む。縄文土器深鉢の細片に混じって、古代の土師器杯（内黒）が出土した。

【SK67】

調査区中央やや南で検出した東西 0.88 m、南北 1.32 m、深さ 0.5 m の土坑で、P52 よりも古い。遺物は、縄文土器深鉢、石器剥片が出土した。

【SK126】

調査区北壁際で検出した東西 1.1 m、南北 0.55 m、深さ 0.18 m の土坑で、P130 よりも新しい。遺物は、縄文土器深鉢が出土した。

(3) ビット

ビットは 129 基を検出した。直径 0.4 m、深さ 0.5 m 前後の比較的大きく深いものと、直径 0.15 ～ 0.2 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m 前後の比較的浅いものがある。多くのビットからは縄文土器の細片が出土したが、P138 からは古代の土師器杯（内黒）が出土した。また、P4 から中近世の、P94・116 から時期を特定できない土師器片が出土した。

(4) 溝跡

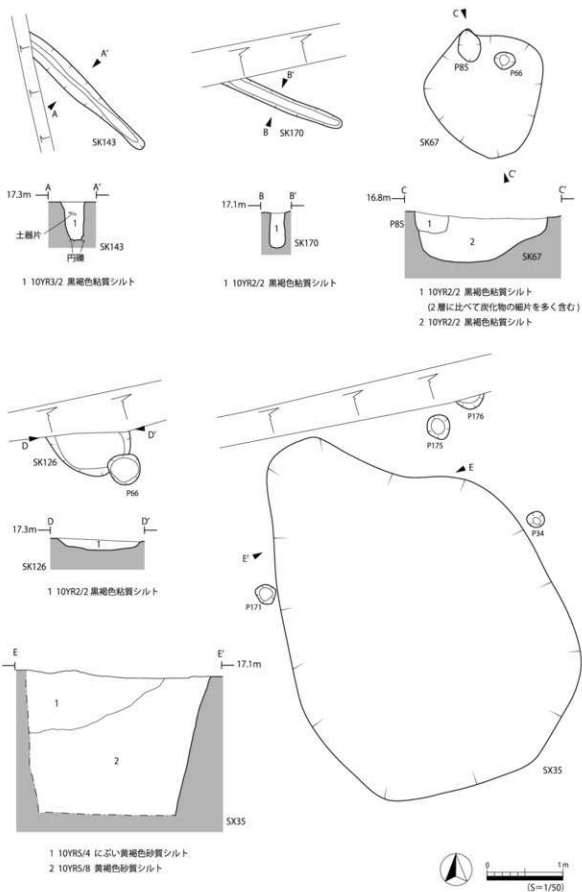
溝跡 7 条は、溝の深浅、断面形に若干の差は認められるものの、いずれも南北溝である。調査区南西部で SD148、調査区南壁際東部で SD164 ～ 166、南壁際西部で SD167 ～ 169 を検出した。南壁際で検出した 6 条の溝の埋土は現代の遺物を含む層に対応する。SD164 ～ 168 は、整地土造成以前の近現代の畑等耕作関係の痕跡と推測できる。

SD148 は、調査区南西部で検出した断面形が浅い皿状を呈する溝で、遺物は、縄文土器の細片と木片、石器剥片等が出土した。

(5) その他

採掘跡とした遺構は、部分的な掘削にとどめた為に、遺跡北西部で検出された坑道跡（気仙沼市 1995）に対応するかは明らかではない。ガラス・陶磁器等遺物出土の有無に差異があり、攪乱坑の可能性が残るものの、土坑の深さや埋土の状況から採掘跡の可能性が高いと考えた。

SX74 ～ 77、84 を調査区中央部、SX78 を北壁際、SX80・82 を南西部、SX81 を南壁際で検出

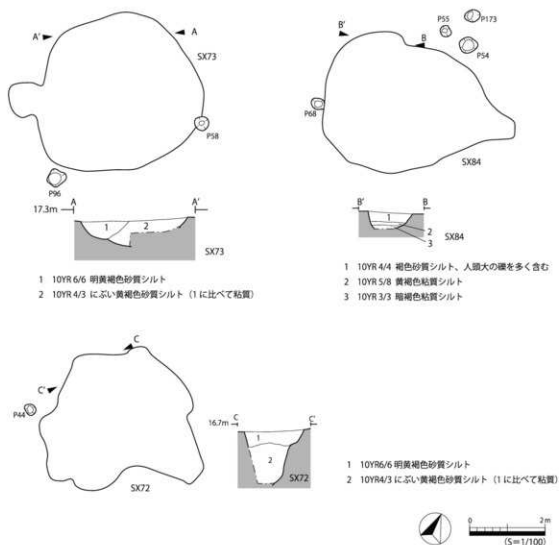


第9図 検出遺構平面図・断面図(2)

した。

各遺構の平面形は円形、楕円形ないし不整形で、土坑状を呈する。埋土には縄文土器片に混じってガラス片等を含む。ガラス片・ガラス瓶以外に、SX74から磁器、SX75から鍔銭^{びたせん}と陶器片、SX77から銅線、SX78からアンプル片等が出土した。SX23・35・70～73・84では、平面形が円形ないし隅丸方形の一端がのび、ガラスや近現代の陶磁器片等は出土しなかった。SX23・35は調査区北東部、SX72・84を東部、SX70を東壁際、SX71を南東部、SX73を中央部で検出した。遺構の深さは、SX23が2.6 m以上、SX35が2.2 m以上、SX72が1.6 m以上、SX70が1.0 m以上、SX73が0.9 m以上あり、埋土に礫を多く含む。

採掘跡としたこれらの遺構が、新村村実業補習学校が移転した大正14（1925）年以前のものとすれば、現代の遺物については陥没に由来するものと考えるのが自然であるが、採掘時期は不明である。



第10図 検出遺構平面図・断面図(3)

2. 遺物

(1) 土器

土器は、縄文土器、土師器、陶器、陶磁器等が出土した。遺構に伴う土器を中心に掲載したが、SK158では古代の土師器と縄文土器が、複数の採掘跡ではガラス片等と縄文土器が共存する。このことから、古代の土坑や時期不明の採掘跡が掘削された段階では、縄文時代の遺物包含層が残っていたと推測される。

SK1 (11-1~20): 1~4・11は磨消縄文。5は半截竹管で沈線を施文する。6・15は屈曲する口縁を横ナデする。8・13は隆帯で区画し、9は隆帯に刺突を刻む。12は内外面を磨く。17は突起部外面に人面を表現する。14・16・18・19は縄文の地文のみである。縄文は、6・13がL、3・20がR、1・2・4・9・14がLR、11・15、18がRL、16がRLRで、施文方向は1~4・6・9・14・16・18が縦、13・19が縦・斜め(横走)、17が斜め(横走)、11・15が斜め(縦走)、5が横方向である。20は捻糸文Rを口縁部に横方向に、その下を縦方向に施文する。

SK67 (11-21~23): 21は磨消縄文、22・23は地文で、23は縄文RLを斜(縦走)・縦方向、22が捻糸文Rを縦方向に施文する。

SK143 (11-24): 縦位の結節縄文(RL)。

SK150 (12-1): 縄文LRを縦方向に施文する。

SK158 (12-2~10): 2~9は縄文土器深鉢、10は土師器杯である。2は口縁部外面に粘土細貼り付け文と刻み目文を施す。3は磨消縄文で、4は隆帯・鎖状隆帯を施す。5は半截竹管で区画文を施す。6~9は縄文の地文で、6、7はLR、8はLを縦方向に、9はLを斜(横走)方向に施文する。10は底部外面塗削りで、内面を黒色処理する。

SK160 (12-11~14): 11は口縁部外面を沈線で施文する。12・13は縄文LRの地文で、12は縦方向、13は斜(横走)方向に施文する。14は底部外面に網代痕がある。

P15 (12-15): 内外面を磨く。

P44 (12-16): 太い沈線と細い沈線で施文する。

P46 (12-17~21): 17は磨消縄文。18は沈線で施文する。19は縄文LRを斜(横走)に、20は捻糸文Lを縦方向に施文する。21の地文は半截竹管文。

P58 (12-22・23): 地文は半截竹管文。

P64 (12-24): 結束羽状縄文(左RL、右LR)を縦方向に施文する。

P68 (12-25): 縄文RLを横方向に施文する。

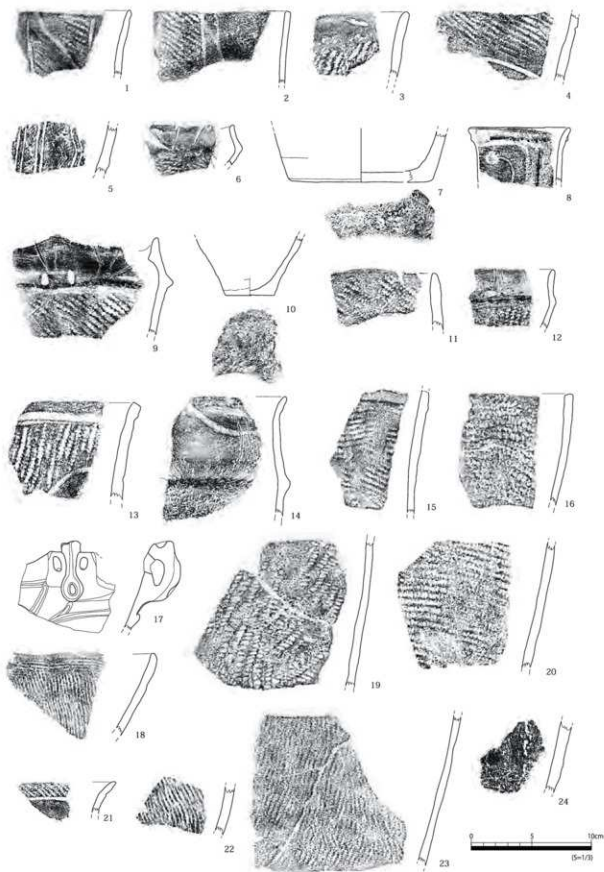
P94 (12-26): 縄文RLを縦方向に施文する。

P95 (12-27): 半截竹管の沈線、刺突で区画文を施す。

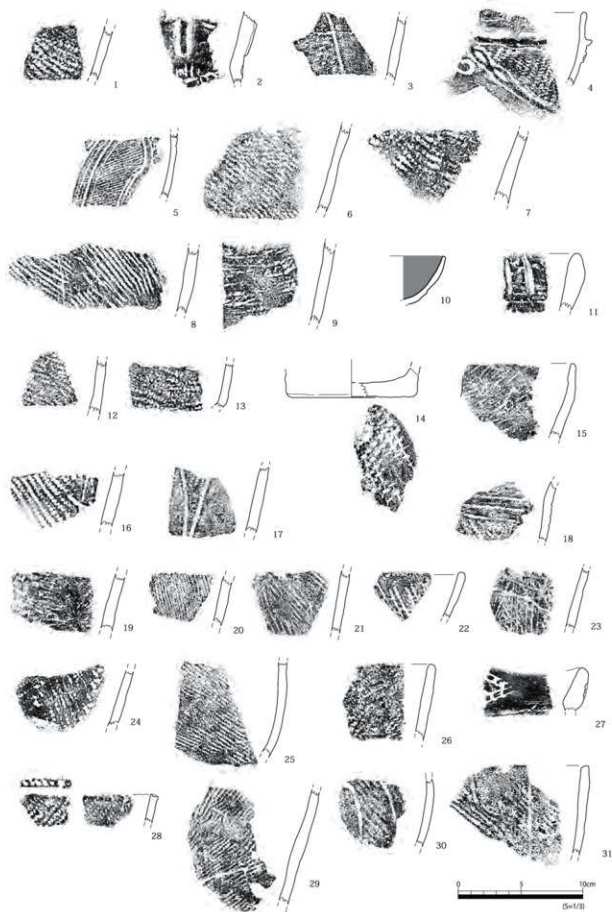
P111 (12-28): 表裏縄文土器。縄文LRを横方向に施文する。口端部を刺突する。胎土に繊維を含む。

P130 (12-29): 地文は縄文LRで横方向に施文する。

P161 (12-30・31): 30は磨消縄文。31は地文の縄文がLRで、縦方向に施文する。



第11図 土器 (1)



第12図 土器 (2)

第4表 土器観察表

図番号	遺構	層位	器種	部位 (法量)	特徴	時期・備考	写真 図版
11-1	SK1	4層	縄文土器深鉢	平縁口縁	外面縄文LR縷→縦方向沈線(区画)→ナデ。遺洩縄文/内面磨減	大木10式から門前式	7-3
11-2	SK1	4層	縄文土器深鉢	平縁口縁	外面縄文LR縷→縦方向沈線→ナデ。遺洩縄文/内面磨減	大木10式から門前式	7-4
11-3	SK1	4層	縄文土器深鉢	平縁口縁	外面縄文LR縷→口縁部横ミガキ。遺洩縄文/内面横ミガキ	粗製土器	7-5
11-4	SK1	3層	縄文土器深鉢	胴部	外面縄文LR縷→沈線・ナデ。遺洩縄文/内面横ナデ	大木10式	7-6
11-5	SK1	3層	縄文土器深鉢	胴部	外面縄文LR縷→半截竹管沈線/内面粗ミガキ	大木6式	7-7
11-6	SK1	3層	縄文土器深鉢	波状口縁	外面胴部縄文し縷→口縁部横ナデ/内面横ナデ	粗製土器	7-8
11-7	SK1	3層	縄文土器深鉢	胴底部、復原口径12.0 cm	外面磨減/内面ミガキ	底部	7-9
11-8	SK1	2層	縄文土器深鉢	平縁口縁、復原口径8.4 cm	外面隆帯・沈線、内外面磨減	大木10式から門前式	7-10
11-9	SK1	2層	縄文土器深鉢	波状口縁	外面横ナデ→隆帯下縄文LR縷→隆帯中央刻突2(下から上へ)/内面横ナデ	大木10式から門前式	7-11
11-10	SK1	2層	縄文土器深鉢	胴底部、底径4.0 cm	底部外面木葉縷→胴部内面粗ミガキ/内面粗ミガキ	底部	7-12
11-11	SK1	埋土	縄文土器深鉢	平縁口縁	外面縄文RL縷(縦走)→沈線→胴部ナデ・口縁部横ナデ。遺洩縄文/内面ミガキ	大木10式	7-13
11-12	SK1	埋土	縄文土器深鉢	平縁口縁	内外面ミガキ(磨面磨減)	大木10式	7-14
11-13	SK1	埋土	縄文土器深鉢	胴部	外面縄文LR縷・斜(横走)→低い隆帯→ミガキ/内面ミガキ	大木10式から門前式	7-15
11-14	SK1	2層	縄文土器深鉢	小波状口縁	外面縄文LR縷/内面横ミガキ	粗製土器	7-16
11-15	SK1	2層	縄文土器深鉢	平縁口縁	外面胴部縄文RL斜(縦走)→口縁部横ナデ/内面横ミガキ	粗製土器	7-17
11-16	SK1	埋土	縄文土器深鉢	平縁口縁	外面縄文RLR縷/内面ミガキ。外面保付蓋	粗製土器	8-1
11-17	SK1	埋土	縄文土器深鉢	口縁突起部	外面隆帯→LR斜(横走)→ミガキ/内面ミガキ 突起外面に両目を穿孔。口を窪みで人面を表裏	門前式	8-2
11-18	SK1	埋土	縄文土器深鉢	胴部	外面縄文RL縷/内面ナデ	粗製土器	8-3
11-19	SK1	埋土	縄文土器深鉢	胴部	外面縄文LR縷・斜(横走)。保付蓋/内面ナデ	粗製土器	8-4
11-20	SK1	埋土	縄文土器深鉢	平縁口縁	外面口縁部縷系文R縷→縷系文R縷/内面横ナデ	粗製土器	8-5
11-21	SK67	埋土	縄文土器香	平縁口縁	外面RL縷→沈線(区画)・ナデ。遺洩縄文/内面ミガキ	後期	8-6
11-22	SK67	埋土	縄文土器深鉢	胴部	外面縷系文R縷/内面ミガキ	粗製土器	8-7
11-23	SK67	遺構確認	縄文土器深鉢	胴部	外面縄文RL斜(縦走)・縷/内面粗ミガキナデ	粗製土器	8-8
11-24	SK143	埋土	縄文土器深鉢	胴部	外面縷ナデ→横ナデ→縄文RL縷縷縷/内面磨減	大木7式	8-9
12-1	SK150	埋土	縄文土器深鉢	胴部	外面縄文LR縷/内面ナデ	粗製土器	8-10
12-2	SK158	埋土	縄文土器深鉢	口縁	外面粘土貼付。刻目→沈線/内面横ナデ	大木6・7式	8-11
12-3	SK158	埋土	縄文土器深鉢	胴部	外面縄文RLR縷→沈線→ナデ。遺洩縄文/内面ミガキ	大木10式	8-12
12-4	SK158	埋土	縄文土器深鉢	波状口縁	外面縄文RLR縷→隆帯・波状隆帯→沈線→ミガキ/内面ミガキ	門前式	8-13
12-5	SK158	埋土	縄文土器深鉢	胴部	外面縄文LR縷→半截竹管沈線(区画)/内面ミガキ	後期	8-14
12-6	SK158	埋土	縄文土器深鉢	胴部	外面縄文LR縷/内面ミガキ	粗製土器	8-15
12-7	SK158	埋土	縄文土器深鉢	胴部	外面縄文LR縷→ナデ/内面粗ミガキ	粗製土器	8-16
12-8	SK158	埋土	縄文土器深鉢	胴部	外面縄文LR縷/内面ミガキ	粗製土器	8-17
12-9	SK158	埋土	縄文土器深鉢	胴部	外面縄文し縷(横走)留転/内面ミガキ	粗製土器	8-18
12-10	SK158	埋土	土師器杯	口縁部、復原口径14～15 cm	口縁部が内寄し。口縁部と底部の境は段を有する 口縁部外面横ナデ。底部外面磨減。内面磨減(磨減)。内面黒色粘質	8世紀後半	8-19
12-11	SK160	埋土	縄文土器深鉢	平縁口縁	外面ナデ→外面磨減	大木6式	8-20
12-12	SK160	埋土	縄文土器深鉢	胴部	外面縄文LR縷/内面ナデ	粗製土器	8-21
12-13	SK160	埋土	縄文土器深鉢	胴部	外面縄文LR斜(横走)/内面横ナデ	粗製土器	8-22
12-14	SK160	埋土	縄文土器鉢	底部、復原底径10.4 cm	底部外面網代縷(ござ目2本罫り2本縷え)→横ナデ/内面横ナデ	底部	8-23
12-15	P15	埋土	縄文土器深鉢	平縁口縁	外面縄文RL縷/内面磨減	粗製土器	8-24
12-16	P44	埋土	縄文土器深鉢	胴部	外面縄文LR縷→縷沈線(縷)→低沈沈線(太)/内面ミガキ	大木6式か	9-1
12-17	P46	埋土	縄文土器深鉢	胴部	外面縄文RL縷→沈線→ナデ。遺洩縄文/内面ミガキ	大木10式	9-2
12-18	P46	埋土	縄文土器深鉢	胴部	外面縄文LR縷→沈線・横ナデ/内面磨減	大木10式	9-3
12-19	P46	埋土	縄文土器深鉢	胴部	外面縄文LR斜(横走)→横ナデ/内面ミガキ	粗製土器	9-4
12-20	P46	埋土	縄文土器深鉢	胴部	外面縷系文し縷/内面ミガキ	粗製土器	9-5
12-21	P46	埋土	縄文土器深鉢	胴部	外面半截竹管/内面ミガキ	粗製土器	9-6
12-22	P58	埋土	縄文土器深鉢	平縁口縁	内外面ナデ→外面沈線(半截竹管)	粗製土器	9-7
12-23	P58	埋土	縄文土器深鉢	胴部	外面沈線(半截竹管)/ナデ	粗製土器	9-8
12-24	p64	埋土	縄文土器深鉢	胴部	外面結束形沈線(左RL・右LR縷)/内面ミガキ	大木7式か	9-9
12-25	p68	埋土	縄文土器深鉢	胴部	外面RL縷/内面磨減	粗製土器	9-10
12-26	P94	埋土	縄文土器深鉢	平縁口縁	外面RL縷/内面磨減	粗製土器	9-11
12-27	P95	埋土	縄文土器深鉢	波状口縁	外面粘土貼付→半截竹管沈線→半截竹管刻突(区画)/内面ナデ	大木6式	9-12
12-28	P111	埋土	縄文土器深鉢	平縁口縁	縷系土器/裏裏縄文/内外面縄文LR縷/口縁部磨減	早期後葉一末	9-13
12-29	P130	埋土	縄文土器深鉢	胴部	外面縄文LR縷/内面ナデ	粗製土器	9-14
12-30	P161	埋土	縄文土器深鉢	胴部	外面LR縷→沈線→ナデ。遺洩縄文/内面磨減	大木10式	9-15
12-31	P161	埋土	縄文土器深鉢	平縁口縁	外面LR縷/内面磨減	粗製土器	9-16

(2) 土製品

円盤状土製品4点が、SK1 から3点、P46 から1点出土した。平面形は、円形、楕円形、木葉形で、いずれも側縁を研磨する。



第13図 土製品

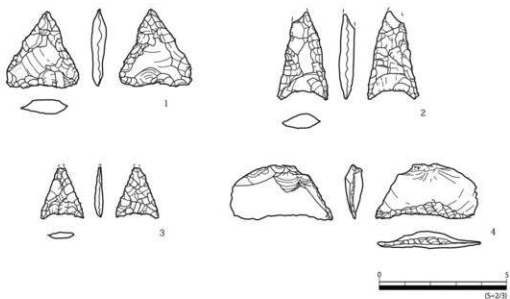
第5表 土製品 観察表

図番号	遺構	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	部位	平面形	研磨	特徴	残存状態	写真図原
13-1	SK1	埋土	3.4	(3.6)	0.9	(14.4)	胴部	円形	側縁	内外面ミ ガキ	一部を欠く	9-17
13-2	SK1	3層	3.8	(3.7)	0.8	(13.4)	口縁部	木葉形	側縁	外面穂糸文 R 縦回転、内面横ナデ	一部を欠く	9-18
13-3	SK1	埋土	4.7	5.5	0.6	22.4	胴部	楕円形	側縁	外面縦文 LRL 縦回転、内面ナデ	完形	9-19
13-4	P46	埋土	5.2	3.4	1	17.3	胴部	木葉形	側縁	外面沈線 (渦巻文)、内面磨減	完形	9-20

(3) 石器

石器は、石鏃3点、不定形石器1点、剥片21点出土した。1～3はいずれも凹基式無茎鏃で、1は、挟りが浅く、平面形が正三角形に近くやや厚い。2は、挟りがやや深く、側縁は直線的で、身部は二等辺三角形状で細長く、やや厚い。3は、挟りがやや浅く、小型で薄い。1・3がフラスコ状土坑SK1、2がSK1に重複する探掘跡SX23から出土した。4は不定形石器で、SK1から出土した。背面左側辺と腹面縁辺部に二次加工を施し、前者は直線的、後者は凹形を呈する。剥離は準準ないし準平行である。

石器の岩石種は、1～4が珪質頁岩で、出土した剥片21点のうち珪質頁岩が14点、黒曜石が7点である。



第14図 石器

第6表 石器 観察表

番号	遺構	層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	特徴	写真図版
14-1	SK1	3層	石頭	3.02	2.82	0.59	4.4	珸質頁岩	刃基、完形	9-21
14-2	SX23	埋土	石頭	(3.41)	1.955	0.605	(3.3)	珸質頁岩	刃基、先端を欠く	9-22
14-3	SK1	造成土	石頭	(1.98)	1.68	0.365	(0.7)	珸質頁岩	刃基、先端を欠く	9-23
14-4	SK1	埋土	不定形 石頭	2.14	(4.07)	(0.67)	(4.7)	珸質頁岩	遠端部左側縁部を欠く	9-24

第4章 まとめ

平館遺跡・平館跡は、気仙沼湾奥の微高地上に立地している。調査地は後世の削平や改作が著しく、確認調査において縄文時代の竪穴建物の可能性を考えた遺構やその残滓かと推測した遺構は、調査区全域に散在する掘削時期が不明の採掘跡の可能性が高いことが判明した。

今回の発掘調査においては、ビット群や縄文時代の落とし穴と考えられる土坑2基とフラスコ状土坑1基等を検出したものの、良好な状態の遺物包含層は検出されず、自然堆積層の検出範囲も調査区南東隅に限定された。縄文時代の最も古い土器は、早期後葉から末に遡る表裏縄文土器（繊維土器）の細片が出土した。フラスコ状土坑1基からは、比較的まとまった量の縄文時代中期末から後期初頭頃の土器が出土した。この土器は、平成8（1996）年に遺跡北斜面の遺物包含層から出土した土器や、確認調査で土坑から出土した土器と年代的に一致するので、調査地付近に縄文時代中期末から後期初頭頃の集落跡を想定することができた。古代については土坑とビットから奈良時代の内面を黒色処理した非ロクロ土師器が出土した。中世・近世については、良好な状態の遺構や遺物を検出することはできなかった。

参考・引用文献

本文では、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターは岩手県、各県・市町村教育委員会・編集委員会は県・市名と省略した。

稲村晃嗣 2008 「前式土器」『総覧縄文土器』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002 『清水遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 320 集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2020 『長谷堂貝塚発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 382 集

大塚徳郎・竹内利夫 1987 『宮城県の地名』日本歴史地名大系 4 平凡社

大槻源四郎・永広昌之・布原啓史 2014 『宮城県の地質』『最新東北の地質合冊版』全日本地質調査協会連合会東北地質協会広報委員会

興野義一 1984 「大木式土器について」『宮城の研究 第 1 巻 考古篇』

國井秀紀 2013 「縄文土器底面に見られる銅代王痕の素材検討」『福島県文化財センター白河研究紀要 2013』

熊谷満 2019 「気仙沼市松川地区の赤岩遺跡・中館跡・月館遺跡について」『宮城考古学第 21 号』

気仙沼市教育委員会 1946 『塚沢横穴古墳群』宮城県気仙沼市文化財調査報告書

気仙沼市教育委員会 1995 『平館遺跡・平館跡 現地説明会資料』

気仙沼市教育委員会 2016 『関館跡』気仙沼市文化財調査報告書第 8 集

気仙沼市教育委員会 2018 『台の下遺跡』気仙沼市文化財調査報告書第 11 集

気仙沼市教育委員会 2018 『台の下遺跡 9 区』気仙沼市文化財調査報告書第 12 集

気仙沼市教育委員会 2020 『気仙沼市内発掘調査報告書 4』気仙沼市文化財調査報告書第 19 集

気仙沼市教育委員会 2021 『台の下貝塚』気仙沼市文化財調査報告書第 24 集

気仙沼市教育委員会 2022 『波登集落遺跡』気仙沼市文化財調査報告書第 26 集

気仙沼市総務部市史編さん委員会 1986 『気仙沼市史 1 自然編』

気仙沼市総務部市史編さん委員会 1993 『気仙沼市史Ⅳ近代・現代編』

気仙沼市総務部市史編さん委員会 1998 『気仙沼市史補遺編 考古・古文書資料』

小池一之・田村俊和・新塩清高・宮城豊彦 2005 『日本の地形 3 東北』東京大学出版会

佐藤敏幸 2007 『宮城県北部・沿岸部』『古代東北北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』

佐原真 『縄文施文法入門』『縄文土器大成 3』講談社

産総研地質調査総合センター (<https://gbank.gsj.jp/geonavi/geonavi.php>)

紫桃正隆 1973 『史料 仙台南側古城・館 第 2 巻』宝文堂出版

鈴木克彦 『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣

鈴木保彦 2000 『山内清男縄文講義ノート』『縄文時代 11 号』

中野幸大 2008 「大木 7a ～ 8b 式土器」『総覧縄文土器』

新月村誌編纂委員会 1957 『新月村誌』

早瀬亮介 2008 「初期大木式土器」『総覧縄文土器』

平野祐 2008 『岩手県内縄文時代早期後期から末葉「表裏縄文土器類」土器の施文様について』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要 27

藤田邦彦ほか 1981 『日本城郭体系第 3 巻山形・宮城・福島』新人物往来社

益富壽之助 1955 『原色岩石図鑑』保育社

益富壽之助 1987 『原色岩石図鑑 全改定新版』保育社

宮城県教育委員会 1986 『田崎貝塚』宮城県文化財調査報告書第 111 集

宮城県教育委員会 2003 『高倉貝塚』宮城県文化財調査報告書第 192 集

宮城県教育委員会 2020 『小堀遺跡・芝罘遺跡』宮城県文化財調査報告書第 253 集

村田晃一 2007 『宮城県中部から南部』『古代東北北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』

森幸彦 2008 「大木 9・10 式土器」『総覧縄文土器』

榎澤清一 1990・1993 「大木 9・10 式土器論（上・下）」『史学考古学研究第 3・4 号』

山内清男 1964 『日本原始美術 1』講談社

陸前高田市教育委員会 1997 『堂の前貝塚発掘調査報告書Ⅰ』陸前高田市文化財調査報告書第 18 集

陸前高田市教育委員会 1997 『堂の前貝塚発掘調査報告書Ⅱ』陸前高田市文化財調査報告書第 21 集

M.-L.Inizan H.Roche J.Tixier 著 大沼克彦・西村良宏・鈴木美保訳 1998 『石器研究入門』クワパロ



図版 1-1 空中写真遠景（南から）



図版 1-2 空中写真遠景（東から）

図版 1 空中写真遠景



図版 2-1 空中写真近景（南から）



図版 2-2 空中写真近景（西から）

図版 2 空中写真近景



図版 3-1 SK1 (西から)



図版 3-2 SK1 底面 (西から)



図版 3-3 SK1 断面 (西から)



図版 3-4 SK1 断面 (西から)



図版 3-5 SK143 (南西から)



図版 3-6 SK143 (北西から)



図版 3-7 SK143 断面 (南西から)



図版 3-8 SK170 (南東から)

図版 3 遺構写真 (1)



図版 4-1 SK67 (西から)



図版 4-2 SK126 断面 (西から)



図版 4-3 SK150 断面 (北から)



図版 4-4 P4 (西から)



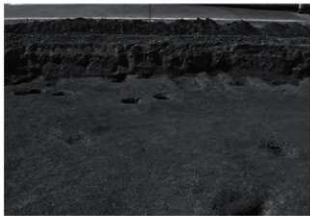
図版 4-5 P13 (西から)



図版 4-6 P138 断面 (西から)



図版 4-7 SD164~166 (北から)



図版 4-8 SD167~169 (北から)

図版 4 遺構写真 (2)



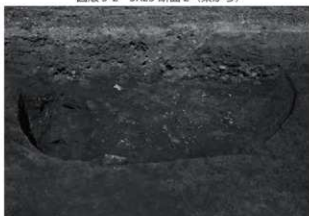
図版 5-1 SX23 断面 (東から)



図版 5-2 SX23 断面 2 (東から)



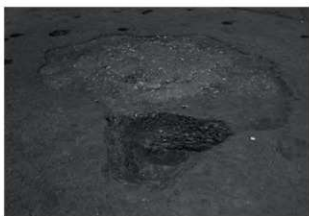
図版 5-3 SX35 断面 2 (北から)



図版 5-4 SX70 断面 (西から)



図版 5-5 SX71 断面 (北から)



図版 5-6 SX72 断面 (東から)



図版 5-7 SX73 断面 (北から)



図版 5-8 SX84 断面 (北から)

図版 5 遺構写真 (3)



作業風景



小学生遺跡見学風景

図版6 作業風景・小学生遺跡見学風景



1・2：平成30年度確認調査遺物

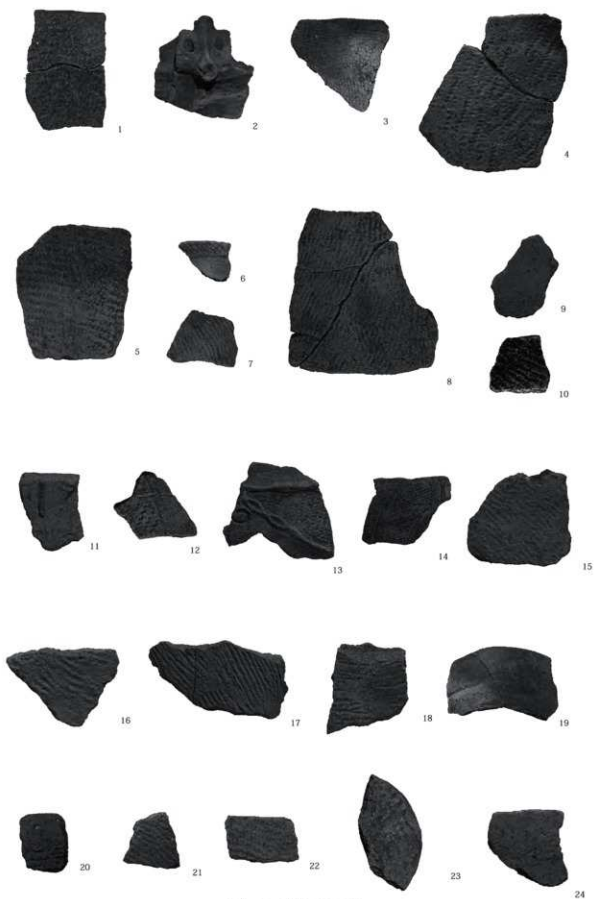
1：S = 1/3, 2：S = 2/3



3～17：令和2年度本調査遺物

図版7 遺物写真(1)

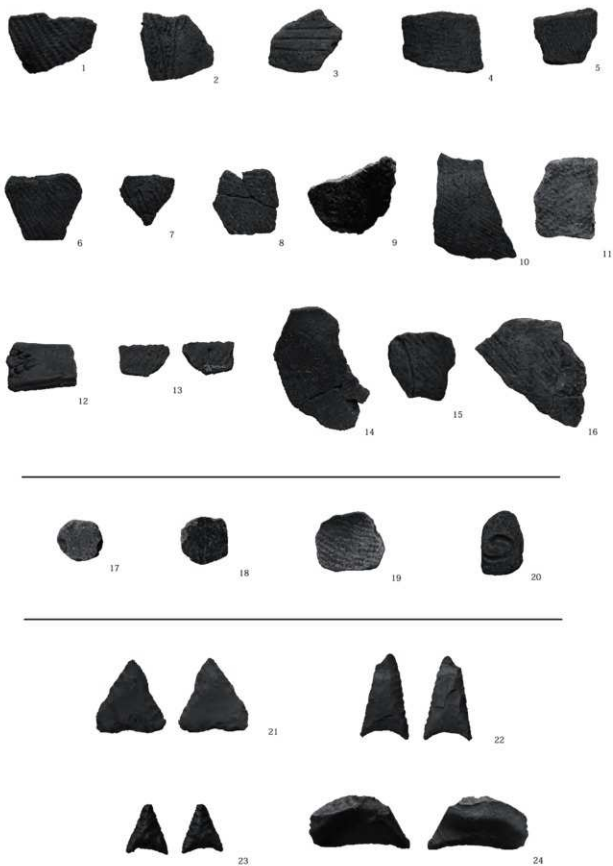
3～17：S = 1/3



1～24：令和2年度本調査遺物

図版8 遺物写真(2)

1～24：S = 1/3



図版9 遺物写真 (3)

1 ~ 24 : 令和2年度本調査遺物

1 ~ 20 : S = 1/3, 21 ~ 24 : S = 2/3

報告書抄録

ふりがな	たいらだていせき・たいらだてあと							
書名	平館遺跡・平館跡							
副書名	新月公民館新築整備事業に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	気仙沼市文化財調査報告書							
シリーズ番号	28							
編著者名	須藤 好直 森 千可子（編）							
編集機関	気仙沼市教育委員会							
所在地	〒988-8502 気仙沼市魚市場前1番1号 TEL 0226-22-3442							
発行年月日	西暦 2023 年 3 月 20 日							
ふりがな 所収遺跡名	しょうじち 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
たいらだていせき 平館遺跡	気仙沼市 切通	042056	59027	38°54'40"	141°32'38"	2020.5.18 ～ 2020.7.3	778.0㎡	記録・保存調査
たいらだてあと 平館跡	気仙沼市 切通	042056	59055	38°54'40"	141°32'38"			記録・保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
平館遺跡	散布地	縄文時代早期～後期		落とし穴 2 基、フラスコ状土坑 1 基、探掘跡 16 基、ピット、溝跡		縄文土器、土製品、石器、土師器		
平館跡	城館跡	中世		なし		なし		
要約	平館遺跡・平館跡は宮城県北東部の気仙沼湾奥の微高地上に立地している。 駐車場・校庭としての削平及び時期不明の探掘跡等による後世の改作が著しく、遺跡の残存状態は良くない。 平館遺跡については、今回の調査で、縄文時代と奈良時代の遺構、遺物が検出された。 縄文時代は土坑、貯蔵穴、落とし穴等を検出しており、早期後葉から後期前葉の土器、土製品、石器が出土した。 土坑や貯蔵穴の時期は中期末後期初頭で、従前の調査で検出されていた遺跡北斜面遺物包含層の時期に対応する。 奈良時代は土坑を検出し、縄文土器に混じって内面黒色処理した非クロ土師器杯が出土した。 平館跡については、顕著な遺構・遺物は検出できなかった。							

気仙沼市文化財調査報告書第 28 集

平館遺跡・平館跡

新月公民館新築整備事業に伴う発掘調査報告書

発 行 日 2023 年 3 月 20 日

編集・発行 気仙沼市教育委員会

〒 988-8502

宮城県気仙沼市魚市場前 1 番 1 号

印 刷 双葉印刷株式会社

〒 988-0866

宮城県気仙沼市内松川 41 番地 1 号
